

地歴公民(世界史)

名古屋大学 文学部、情報学部(人間・社会情報学科)(前期) 1 / 2

<全体分析>

試験時間 90 分

解答形式

大問単位では、例年、問題Ⅰ～Ⅲは語句で解答する記述式と短文の論述式(100字程度まで)が併用され、一部に史料を記号で選択・時代配列する客観式が用いられている。問題Ⅳは長文の論述式(450字)となっている。

分量・難易(前年比較)

分量(減少・やや減少・**変化なし**・やや増加・増加)

難易(易化・**やや易化**・変化なし・やや難化・難化)

出題の特徴や昨年との変更点

問題Ⅳの長文論述で、2011年以来久しぶりに中国史が扱われた。昨年350字から450字と大幅に増加した字数は今年も450字のままで、指定語句についても昨年同様「すべてを用いる」形式であった。

出題分野では、地域別では例年同様に欧米とアジアが2題ずつ出題されたが、時代別では、昨年1題だった前近代の問題が3題に増加し、戦後史からの出題もなかった。

設問数は昨年とほぼ同数で、記述式と客観式の設問を手際よく解答できれば、短文・長文の論述式の字数を考えても、90分の制限時間で解答するのは可能である。

その他トピックス

問題Ⅰ～Ⅲで、文献資料を読み取らせる設問が今年は姿を消したが、問題Ⅳに「そのような状況はどのように生み出されたと考えられるか。」という問いかけがあり、これは入試改革を意識した表現と思われる。また、共通テスト的な短文を選択する設問が2題出題された。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	記述式 論述式 客観式	前近代のアジア史	中央ユーラシアから南アジア・東アジアの前近代を総合的に扱った問題。短文論述の設問では、基本的事項を簡潔に説明できる力が試されている。	標準
II	記述式 論述式 客観式	16～17世紀のハブ スブルク家	文献資料を問題文に引用した問題。問3で問われているアカプルコ貿易の内容は、2020年に問題Ⅳの長文論述でも扱われているので要注意。	標準
III	記述式 論述式 客観式	アメリカ合衆国の 歴史	6つの史料とその題名などを結びつける記号解答と、それらの時代配列、各史料に関する記述式・短文論述で構成されており、出題レベルは標準的である。問5(2)西ルイジアナは、七年戦争後にフランス領からスペイン領となっていた。	標準
IV	論述式 (長文 450 字)	前近代の中国にお ける官僚制の変遷 (漢代～明・清代)	字数は450字であるが、指定語句は基本的事項である。中国史で頻出する官僚制を問うものであり、地主勢力と官吏登用法について儒教とのかかわりを軸に書いていけばよい。教科書を丁寧に学習していれば対応できる。	標準

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- 大問のテーマは、欧米・アジアの地域から出題され、東西交流なども扱われている。欧米地域では、ギリシア・ローマなど古代地中海世界、中世～現代のヨーロッパ、アメリカ合衆国史、アジア地域では中国史をはじめ、インド・東南アジア史、広域の交易活動などが出題されているので、日頃からこれらのテーマを意識しながら学習しよう。特に出題頻度が高い中国史は、儒教などの文化や北方民族・台湾・日本などとの外交関係を含めて丁寧に学習し、粘り強く対応できるようにしておきたい。また、近年は戦後史も出題されるので、教科書の内容を最後まで手を抜かずに学習することが重要である。
- 難易度としては、一部に難しい設問が出題されることがあるが、全体には、基本的事項を総合的に捉える力が試されている。これは史料・文献を用いた問題でも同様なので、平易な設問を絶対に落とさない確実な学習が必要である。
- 問題Ⅳの長文論述は、難問もあるが近年は基本的・標準的レベルの出題が多いので、その場合は高得点をねらえる可能性がある。扱われるテーマは、歴史的事象の背景・構造・経過やその因果関係などが問われることが多いので、日頃から世界史を大きな視点で捉える学習をしていく姿勢が大切である。対策としては、指定語句・グラフ・史料・写真などを使った論述問題の演習が必要となる。具体的には、名古屋大学の過去問だけでなく、同様のテーマを出題する他大学の過去問や論述対策の問題集にも取り組むのがよいだろう。また、演習にあたっては、学校や予備校での添削指導をうけて、論述上の欠点を修正しておきたい。
- 過去問全体をよく研究し、頻出する事項については、記述式の設問であっても 100 字程度までの短い文章で説明できる学力を身につけたい。